

財団だより

# 多摩川

1986.6. 第30号



ゲンジホタル(左幼虫、右成虫)  
成虫は5月下旬から6月中旬に  
かけ発生する



下水処理水の通水によってホタルの復活が期待される。玉川上水(武蔵野市) 1986.5 撮

## ■多摩川風物誌■

### ① ホタル

井の頭公園裏の玉川上水に、3000匹ものホタルが飛んだ。48年7月21日夕。サクラやマツが枝を差しかけたやみの中。光の群舞。「玉川上水を守る会」の幹事をしてきた武蔵野市八幡町の住職、中里崇亮さん(47)は、「これで、ホタルが復活する」と、思っていた。

武蔵野の住民に親しまれて来た玉川上水。太宰治の入水自殺を引くまでもなく、水はとうとうとして流れ、魚が群れをなしていた。もちろん、ホタルも。中里さんは「玉川上水の33本の分流には、全部ホタルがいました。つい42、3年まで、座敷に飛び込んで来たものだった」と往時を振り返る。

上水に舞ったホタルは、中里さんらが「江戸っ子ホタル復活」の願いを込めて山形県・朝日連峰で捕獲、移住させたもの。えさのカワニナも、たつぷりと上水に補給した。これで、ホタルはよみがえるはず、だった。

しかし、一年、二年。ホタルは再び姿を見せなかった。いろいろな理由が取りざたされた。決定的だったのは、50年5月に上水の水が干涸したことだった。

上水に今、水の流れはなく、赤土の川底をさらしたまま。中里さんらの試みは一場の夢で終わったが、その後、ホタルを放した場所に東京都が橋を架けた。名

前は「ほたるぼし」

中里さんによると、都は63年から、上水に毎日2万3200ℓの水を流すという。「そうになったら、もう一度夢を追って見よう」と、中里さんは考えている。

この春、茨城県・谷田部町農協の青年たちが、「科学万博会場でホタルを飛ばそう」と計画した。「地元としても何か参加できないか」と考えた末のアイデアだった。超近代的なパピリオンの谷間を、ユラユラとホタルが光跡を描く。考えるだけでも幻想的な光景は、たちまち青年たちの心を捕らえた。

だが、この熱気は、一か月後にはかなしくしぼんだ。見学のために訪れた江戸川区のホタル飼育場。網で囲った大がかりな施設にまず、目を見張り、次いで、カワニナの確保や水質の問題など技術的な難しさにキモをつぶした。「われわれは簡単に復活できると思っていたのですが……。金もないし、技術もない」と語るのは同農協青年部事務局の石川義昭さん(34)。

谷田部町にも、当然ホタルはいた。石川さんによると「20年前まで、どこの田んぼにも無数にいた」。それが農薬を使い出してから、あっという間に姿を消した。「一度壊した自然を取り戻すには、ばく大な金と時間がかかることだけでも分かって、いい勉強になりました」。青年たちは、今、失ったものの大きさをかみしめる。

「とうきょう新歳時記」読売新聞社会部編・1986

## 多摩川散歩



水神社奥宮と筆者（1985.8）

### ●水神社奥宮・みづひ(水干)

ナチュラリスト 田辺 薫

昔、東京市の水道局に勤めていた私は昭和10年5月21日の水神社例祭の時初めて奥宮に参拝し、ここが多摩川の源頭「みづひ」であることを教えられた。

見ると大きな岩壁の一滴が下の岩に枡形に刻まれたくぼみの中に溜まり、ここから流れだしていた。

地図でみると甲信武蔵の境を分ける甲武信岳、唐松尾、雲取山の連山、即ち奥秩父山系中の一山、笠取山の東南側で一ノ瀬川の上流である。

ここは石野遠江守広道編「上水記」寛政3年(1791)にある「玉川水元甲斐国一ノ瀬といふ所也」である。然し最初に現地を踏査したのは東京府吏山城祐之で彼は明治11年9月(1878)一ノ瀬の獵師楠藤五郎を案内人としてここを尋ね「玉川眞源湧出ノ地ナリ」とその復命書「玉川泉源巡検記」にするし、また、「唯舊記ニ據リ一ノ瀬ヲ水源ト説ク而已ニシテ、其原委ヲ識ル者ナシ。是ヲ以テ其源ヲ窮メ、清濁ノ因ヲ探リ、以テ衛生ノ萬一ニ裨補セント欲シ……」とある。

彼の言う舊記とは当時の府庁につたわっていた「上水記」のことで山城はこれを読んで一ノ瀬川

の「水脈ニ沿ッテ泉源ニ到レバ水干ノ下ニ巨大ナル花崗石アリ、其下ヨリ涌出スル清水……」であった。

「みづひ」と言う沢はあるが水干と呼ばれる地名はないのに山城は水干と宛字を書いてしまった。これが大正時代になって問題となる。

多摩川の水源の沢が水が干し上がるのでは縁起でもない——と、以来水道局では仮名で書くことになったと言う。

岩の少し上に石の祠がある(高45cm巾36cm)これは大正7年5月21日、東京市長法学博士子爵、田尻稲次郎自から出かけ鎮座祭を行った時のものである。

祭神は彌都波能賣神(水神)。

当時の手記を読むと市長はこの水を持ち帰って職員に吞ませたとある。

然し戦後この水は涸れている。笠取山の標高1953m奥宮の水枡の地点は1865mである。

祠の横の窪が昭和40年頃、岩の下の沢が57年と二度にわたって崩壊しているのが影響しているのではないかと言う人もいる。

どうしても「みづひ」の水の欲しい人はここから約100mも下ると沢の水がある。

この水は一度飲むとその味は忘れることができない。



※ この原稿は田辺薫氏の寄稿によるものです。財団だよりは流域にお住まいの方々の交流誌です。皆様の投稿をお待ちしています。

## 私と多摩川



品鶴線(現横須賀線)下あたり・丸子  
(昭和27年頃筆者写す)

丸子山王日枝神社宮司 山本五郎

多摩川のほとり、丸子の里に鎮座する日枝神社は、近江の国坂本日吉大社の分霊社であり、その歴史は今を去る一千百有余年前にさかのぼる。

代々当社の宮司として御奉仕している関係で、多摩川と神社との係わりを少し書いてみたい。

辺りを見下ろす小高いところにあった神社の森の裾を削るようにして、多摩川は滔々と流れていた。しかし今日とちがい、治水の手立てが無かったので、しばしば台風により川が氾濫し流路も変わってしまう。

神社に残る古文書からも知ることが出来る。

それは、天正年間このあたりを支配していた後北条から出されたもので、丸子と対岸の沼目郷(今は沼部と称する)とが洪水により流れが変わった為め境界争いとなり、その訴えに対する判決文であった。因みに此の古文書は北条虎の印判状と称し川崎市の文化財に指定されている。

また、江戸の末、多摩川筋の12ヶ村43人の漁師(原文では獵師某)の名が入った「献上鮎」についての文書(嘆願書)が残っている。

我々が子供の頃には、まだ川漁を生業とする人がいた。今でも正月には河川漁業組合の人々が商

売繁盛河川安全を祈願し昇殿参拝され、そのあと共に一献汲み交わすのが習わしになっている。

川遊びをする足に白魚や色々な小魚がぶつかりまたマルタという大きな魚を、焼いてから醤油、砂糖で濃目に味付けしてよく食べたものである。

Y状の小骨がびっしりな

らんでおり、慣れない人には一苦労だったようだ。

昭和26年まで、お祭りのとき神輿は必ず川に入った。これは寒川神社の浜降祭等と同じく、禊式で、大変雄壮なものであった。しかし神輿も新調、川も汚れがひどくなり、その後禊式は見られなくなり一抹の寂しさを感じたものである。

今境内には他の草木とともに苧麻(からむし、ちよま)が青々と茂っている。雑草の様にはびこるこの草も昔は貴重な織物の原料であり又多摩川の名の起りとも云われている。

都に「貢ぎ物」として納めた献上布がこれであるという。上布田、下布田、調布、砧、等の地名が残っているのもわかる。

境内で飛びまわって遊んでいる子供達への教材ともなればと、また何時かは自らの手で織ってみたいとも思っている。

昭和一桁のもと悪童(中には良い子もいた。)どもの会があり、年に一度飲み、語るのだが、話題はどうしても子供の頃のことになり、その舞台は何故かいつも多摩川なのである。

そして、あの頃は良かった、楽しかった、水が綺麗だった、空がまぶしかった…………。

今はもう…………。それが最後に出る言葉である。

母なる多摩川に育てられた我々が恩返しするのは今なのではないだろうか。

よみがえ

## 甦れ！多摩川

## ○多摩川はどう使われているか



二子玉川の花火 1983年撮  
山道省三

多摩川の花火大会は毎夏7月の終りから8月の始めにかけて各所で行われる。中でも7月の終りの二子玉川の花火大会は、昨年の観客が約10万人といわれる人出であった。多摩川ではほかに六郷の花火（7月下旬）、調布（同）、狛江（同）、府中（8月中旬）、羽村（8月初旬）、秋川（8月中旬）、青梅（7月下旬）といった具合で、多摩川の夏の風物誌として定着している。花火は灯ろう流しや盆踊り大会といった伝統行事といっしょに行われているようで、川の文化を継承していく上でも重要な意味をもっている。

多摩川がどう使われているかについて、今年発行した「多摩川'86」で紹介しているが、スポーツやバーベキューなどのレクリエーションに混じって、灯ろう流し、川施がき、ドンド焼き、おんべ焼きなどが行われている。川が都市のオープンスペースとしての意味でさまざまな使われ方をしている中であって、もともと水辺や川原で行われていた伝統行事がこのところ復活しつつあるようだ。川が舞台でなければならないという使い方とし

ては、川祭り、洗礼式、お会式などの宗教行事、テレビ、映画のロケ、水防訓練といった使い方、それに火を使う飯盒炊きさん、芋煮会、バーベキュー、などがあり、都市の中では火を燃やすことのできる唯一の場といってもよい。このように、川の使われ方を調べてみると実に多様な側面を持つが、川が単にレクリエーションの場として利用されるだけでなく、伝統行事や日頃できない事の体験といった使われ方をすることによって、もっと身近な存在として認識されていくことの方が大切である。川が都市生活の場で忘れられた理由のひとつに、洗い場や舟運といった日常的な係わりがなくなった事があげられる。その事によって単にそうした場がなくなっただけでなく、水神やそれを祀る祭事、伝説なども同時に失なった。これが川に関心を示さない世代を生んだとは言えないだろうか。現代の都市河川で水洗いや水泳ができるとは考えにくい、それ以外で水上バスや屋形舟といった水面を利用するもの、川沿いや川の中を安全な通学路にすることや、使われなくなった農業用水路に水質浄化水路としての役割を持たせる事など現代都市に充分存在する理由を持たせる使い方を工夫することができれば、川は再び私達の生活の場として認識される時が来るはずである。洪水の排除や下水路としての役割りは、川を単一の目的でしぼり、さらに近寄ることを拒んできた。治水上の役割りを否定するものではないが、その中になるべく多くの付加価値をつけ加える発想を持ってないだろうか。決してハズな施設ではなくさりげないものでいいわけである。

宮崎市は大淀川を小中学校のほとんどのカリキュラムの中に組み入れ、野外教室として4月から使い始めた。また河川プールも山口県や九州で見直され始めた。川は使い方によっては多様な姿を私達に見せてくれる。この多様で日常的な使い方が、すでに原体験を持たない若い世代に川に対する見方を変えてくれるはずである。川を川らしく使うという発想をもう一度現代の視点に立って持つことができればと考える。

# 《多摩川およびその流域の環境浄化に》 《 関 する 調 査 ・ 試 験 研 究 募 集 — 第 二 次 — 》

昭和61年度、助成調査研究（第1次）応募の中から、内定したものは、学術研究6件、一般研究6件で、研究課題、代表研究者、予定研究期間は次の通りです。

### 〈学 術 研 究〉

- ①多摩川水系の変異原性調査  
浦野紘平（横浜国立大学工学部助教授） 2年
- ②多摩川下流域・河口域における石油化学物質の微生物分解による浄化能力に関する研究  
村上昭彦（東京農工大学工学部教授） 3年
- ③護岸が流れに及ぼす効果およびアユの生育場との関連について  
玉井信行（東京大学工学部教授） 2年
- ④多摩川支流域における水循環に伴う土壌侵食の研究  
鈴木啓助（都立大学理学部助手） 3年
- ⑤多摩川・秋川合流地域の歴史的研究  
多仁照廣（国税庁税務大学校租税資料室） 3年
- ⑥多摩川流域における緑地保全・景観保育のための樹木の生育密度と群落の空間構造に関する研究  
大山陽生（明治大学農学部教授） 3年

### 〈一 般 研 究〉

- ①多摩水系の近世漁撈関係史料の収集と考察—特に、秋川水系を中心として—  
宮田 満（福生市教育委員会郷土資料室） 2年
- ②多摩川上流山地の積雪と融雪に関する研究  
下川和夫（明治大学政経学部講師） 3年
- ③多摩川の下流における支流や海水の混入について  
青柳隆二（川崎市立宮崎中学校教諭） 1年
- ④玉川上水系の用水流域住民の意識調査および水辺レクリエーションに関する調査

小坂克信（八王子市立第三小学校教諭） 3年  
⑤多摩川下流部における河川水と底質におけるN、Pの分布と相互関係

桑原正見（武蔵野女子学院高校教諭） 2年  
⑥児童・生徒・市民のための多摩川観察ガイドブックの調査研究—多摩川教育河川構想と実践—  
島村勇二（府中市立第七中学校教諭） 3年

本年度継続研究を含めても、本年度助成枠に若干の余裕がありますので、第二次募集を致します。

**公募締切日 昭和61年 7月31日**

応募についての詳細は下記事務局までにご連絡下さい。

〒150 東京都渋谷区渋谷1丁目16番14号  
（地下鉄ビル内）電話（03）400-9142

**（財）とうきゅう環境浄化財団**

### 今までの申請・採用状況（新規）

年度	種 類	申請件数	採用件数	年度	種 類	申請件数	採用件数
50	A類	7	6	57	A類	28	17
51	A類	13	5		B類	12	8
52	A類	31	17	計	40	25	
	B類	8	6		58	A類	25
53	計	39	23	B類	11	8	
	A類	17	8		計	36	18
54	B類	6	6	59	A類	18	9
	計	23	14		B類	8	4
55	A類	19	11	計	26	13	
	B類	8	7		60	A類	37
56	計	27	18	B類	12	9	
	A類	20	12		計	49	24
57	B類	10	7	61 (第1次)	A類	18	6
	計	30	19		B類	8	6
58	A類	16	9	計	26	12	
	B類	11	4		59	A類	249
59	計	27	13	合計	B類	94	65
	A類	16	9		計	343	190
60	B類	11	4				
	計	27	13				

# 財団の事業紹介

## 多摩川'86の発刊について

〈総集編〉 テーマは「川を使う」という主旨で編集を行った。この川を使うという意味は、川と住民とのよりよい関係をとり戻すためにもっと日常的でさりげない使われ方があるのではないか、ということである。内容は、多摩川での歴史的、現代的使われ方の紹介、全国の事例での紹介をふくめ、「川遊びの系譜」「どぶ川文化のすすめ」の論文、川の使い方のアイデアイラストなどによって構成を行った。

〈資料編〉 総集編のテーマに基づいて、多摩川の使われ方として「多摩川河川敷一時占用、自由使用申請記録」を建設省から借用し編集班で整理した。収録した期間は昭和58年から60年分、京浜工事事務所田園調布出張所、多摩出張所、多摩川上流出張所に届けがあった分である。

また小河川、水路の使われ方として多摩川流域の自治体による親水事業について次の自治体について整理収録した。東京都、世田谷区、川崎市、稲城市、府中市、日野市。

(この本をご希望の方は事務局までご連絡下さい。)

### ● 川の用語

#### ① 親水

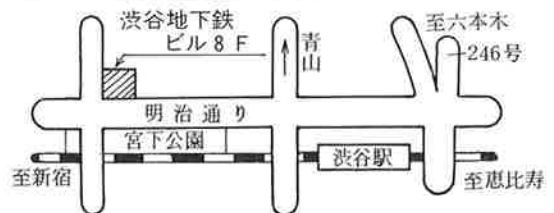
昭和46年東京都による善福寺川計画の中に河川の機能を「流水」と「親水」の二つの概念で計画するとある。ここでは親水の意味を「河川が人間とのかかわりあいのもとに社会的に存在すること自体の持つ機能」(山本弥四郎)と考えている。

親水はその後、49年に古川親水公園(江戸川区)という形で全国的に波及する。それから現在まで「親水施設」の建設が全国で行われてきたが、単に施設面だけの要素ではない親水のあり方について改めて考え直そうという動きがはじめてきた。(文責 山道)

〈訂正〉 前号の「私と多摩川」下記のように訂正します。

左、2行目 に~~俗~~して→に~~俗~~して 右、10行目 昭和6年→昭和16年 右、20行目 中学小学→中原小学 右、22行目 ~~春~~、~~藤川~~崎市長→~~春~~藤川崎市長。

- 発行日 昭和61年6月1日
- 編集兼発行 (財)とうきゅう環境浄化財団  
〒150 渋谷区渋谷1-16-14  
(渋谷地下鉄ビル内)  
TEL (03)400-9142



\*印刷所 雄文社 〒336 浦和市常盤9-11-1  
TEL (0488)31-8125